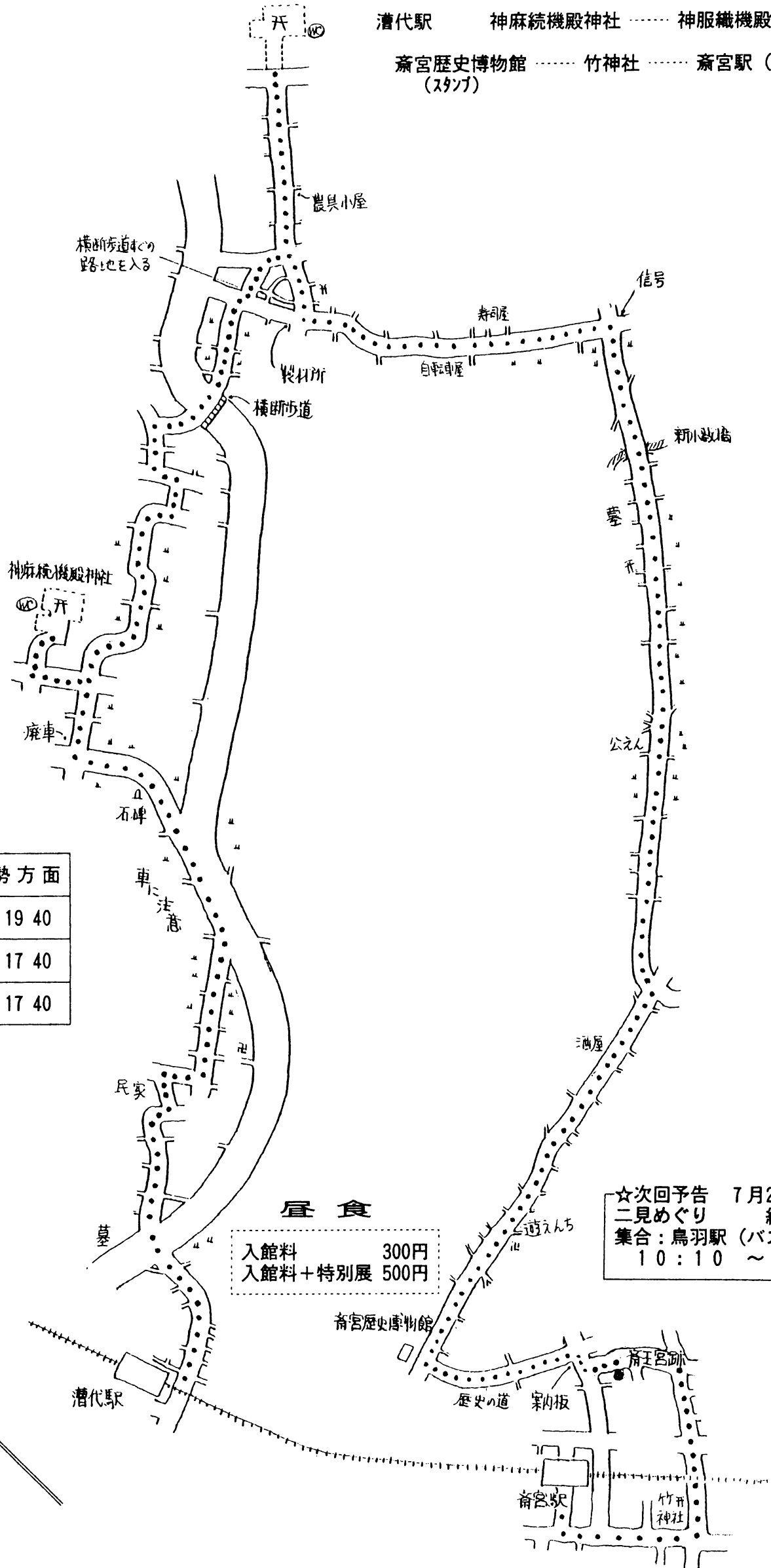


平成6年 お伊勢さん125社めぐり  
6月 齋宮めぐり 参拝18社

神服織機殿神社

漕代駅 神麻続機殿神社 ..... 神服織機殿神社

齋宮歴史博物館 ..... 竹神社 ..... 齋宮駅 (約13\*)  
(スタンプ)



帰りの電車 (齋宮駅)

	松阪方面	伊勢方面
12時	05 24 46	03 19 40
13時	05 25 42	01 17 40
14時	04 26 42	06 17 40

昼食

入館料 300円  
入館料+特別展 500円

☆次回予告 7月24日 (日)  
二見めぐり 約13\*。  
集合: 鳥羽駅 (バスのりば)  
10:10 ~ 10:30

抽選券  
10/5  
齋宮歴史博物館

## 齋宮・機殿めぐり

### ◎神服織機殿神社（かんはとりはたどの） ◎末社八社

松阪市大垣内町（おおがいと）にあり、地元では下館（しもたち）さん、下機殿（しもはたでん）とも呼んでいる。

この地方は古くから紡織業と関係が深く、神様に奉る絹や麻を奉じる服部神部という人々が住んでいた土地である。現在も下御糸（みいと）、上御糸、中麻績（おみ）、機殿、服部などの地名があり、機殿神社、麻績神社という氏神さんもある。神服織機殿神社は、皇大神宮の神御衣（かみぎそ）のうち、和妙（にぎたえ）を奉織する機殿（八尋殿：やひろでん）の守護神をお祭りしている。伝承では服部神部の祖神、天御杵命（あめのみほこのみこと）と、奉織工の祖先、天八千々姫命（あめのやちひめのみこと）をお祭りするといわれている。域内には八つの小さな末社がある。

機殿の起源は「倭姫命世記」によると、天照大御神が垂仁天皇の御代飯野高宮に坐されたときに服織社があり、また五十鈴川の川上に鎮座のとき、宇治の機殿を建て、天棚機姫神（あめのたなばたひめ）の孫の八千々姫命に天上の儀式にならって大神の和妙を織らせたとある。これを天武天皇の御代に現在のこの地に移したものである。中世荒廃、元禄12年再興

### 和妙の奉織

四月と九月の末日、神宮から神職が参向し、神服織機殿神社の齋館で潔齋し白衣白袴をつけてお祓いを受け、午前八時から機殿をお守りくださる神々に祈念する神御衣奉織始祭が始まる。そして御糸を八尋殿におさめ、神職が高機の前で拝をして奉織が始まる。

仕上がった神御衣は数日間、八尋殿内で乾燥したのち巻き、神御衣奉織鎮謝祭まで棚に奉安しておく。

### ◎神麻績機殿神社（かんおみはたどの） ◎末社八社

神麻績機殿神社は、通称上館（かみたち）、上機殿（かみはたでん）とも呼ばれている。正面の建物が荒妙（あらたえ：麻）を奉織する八尋殿である。その左側が神麻績氏の祖神、天八坂彦命（あめのやさかひこ）を祭る神麻績機殿神社である。なお、御前神（みまえのかみ）として八末社が祭られているが、創立祭神とも不明。八尋殿で皇大神宮と別宮の荒祭宮にたてまつる荒妙（麻）を奉織している。

#### 荒妙の奉織

五月と十月の一日、下館の神御衣奉織始祭の奉仕を終えて、午前九時頃から、荒妙の御衣が清く美しく織らせたまえとお祈りするお祭をし、和妙の奉織と同様の奉仕をする。

普通の年は五、六日で織られるが、天候の具合によって十日もかかることがあり、ロウソクのあかりで夜遅くまで残業することもある。

織り立てが終ると神職が袂を入れ、検尺して数日乾燥し、手入れをした後巻きおさめ、十三日まで八尋殿に奉安する。なお、両機殿での奉織は、松阪市の無形民俗文化財に指定されている。

#### ○齋宮跡

天武天皇（673）から後醍醐天皇の頃まで、約660年間、代々の天皇による伊勢神宮齋王の宮殿、役所跡。その存在は予測されていたが、昭和45年に始まった発掘調査による出土品、建物跡で確認され、古代日本を知る有数の史跡となった。歴代齋王のうち、現存するただ一つの墓である醍醐天皇孫女隆子女王の墓地は、東西31m南北43m 史跡東南にある。

齋宮跡の発掘調査が行なわれたのは、昭和45年の団地造成に伴う事前調査であった。以後調査は継続され、その面積は154,000㎡になり、史跡全体の11%にあたる。そこからは掘立柱建物、区画溝、四脚門、緑釉陶器、陶硯、墨書土器など多くの遺構・遺物が見つかっている。

掘立柱建物は、約1,200棟近く見つかったが、瓦の出土がないことから伊勢神宮に見られるような檜皮葺、板葺の建物であったと推定される。

これまでの調査で、奈良時代の建物は宮域の西部に、平安時代の建物は中央部及び東部に多く見られ、時代により場所が移り変わったことがわかる。

宮域東部には、一辺120mの碁盤目状の区画が東西5列、南北4列の存在が明らかになり計画性をもった造営がうかがえる。

齋宮跡の範囲は、東西2km、南北0.7kmの約140haの広大な面積を占めることがわかっている。昭和54年、国の史跡に指定。

## ○齋宮

齋宮は、天照大神の御杖代として、代々の天皇ごとに伊勢に派遣された「齋宮」（未婚の内親王または王女）の御所であるとともに、その事務を取り扱った官人の役所でもあった。

神宮の祭祀と天皇とのかかわりにおいて重要な意味をもっていた。齋宮（齋王）は、未婚の内親王を卜定により定め、天皇の代理として神宮に奉仕する。六月、十二月の月次祭と九月の神嘗祭の年3回の三節祭（三時祭）に、内宮と外宮までおもむき祭儀に参加。それ以外は、齋宮で禊齋の生活。この齋宮にかかわる事務をあつかう役所が齋宮寮。宮人と雑役奉仕の者をあわせて520人ものが配置されていた。この人員は都以外にある役所としては、九州の太宰府につぐ規模。ここにも神宮の律令国家のなかで占めていた重要性が示されている。

齋王の起源は崇神天皇の頃といわれるが、齋王制度が確立するのは天武天皇の頃で、以後、南北朝時代まで約660年間存続した。

## ○大来皇女と大津皇子

大来皇女と大津皇子は、天武天皇の子、母は大田皇女。幼くして母を

失う。大来皇女は13歳のとき齋王として伊勢の神宮に来られた。

天武天皇の死後、大津皇子は皇太子草壁皇子への謀反の疑いで処刑されるが、その前に齋宮に姉を訪ねている。姉26歳、弟24歳の秋の日であった。姉に自分の立場を告げ、もしもの場合の暇ごいであり、神の加護をいのるための伊勢下向であった。

この大津皇子の謀反は「詩賦の興、大津よりはじまれり」と称され、文武に秀でた大津皇子の存在を恐れた<sup>野</sup>野皇后（後の持統天皇）が、わが子草壁皇子の将来のため、しかけた畏であったといわれる。

我が背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露に我が立ち濡れし  
二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

都へ帰る弟を見送る大来皇女、その身を案じて朝まで立尽くした皇女の衣は夜露に濡れてしっとりと重い。都へ帰れば、恐らくは死が待っているであろう弟への肉親の愛情がひしひしと感じられる。

はたして大津皇子は、その直後、朱鳥元年（686）十月二日、謀反が発覚し、翌三日処刑される。

大津皇子辞世

ももつたう警余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

大津皇子の死後、大来皇女は齋王を解かれ都へ帰るが、そのときの歌

神風の伊勢の国にもあらましをなにしか来けむ君もあらなくに

大来皇女は41歳で薨ぜられるが、万葉集に残る歌はこの三首を含めて六首、すべて大津皇子のことを歌ったものである。

○伊勢物語と齋王

「むかし、をとこありけり」ではじまる伊勢物語の六十九段、そのところが伊勢の国へ狩の使いに来たときの、齋王との恋物語である。

「古今集」では、在原業平が伊勢の国に行ったとき、「齋宮なりける人」とひそかに逢い、

女は

君やこし我や行きけむ思ほえず夢かうつつか寝てかさめてかの歌をよこし、

業平は

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵さだめよと返歌をしており、

女の歌を「読人しらず」としている。伊勢物語では、この齋王のことを「齋宮は水の尾の御時、文徳天皇の御むすめ、惟喬の親王の妹」とあり、恬子内親王だとしている。

伊勢物語は、神に仕える女と狩の使いとの逢瀬を、「君やこし・」の歌にみられるように、女の心のおののきをスリリングに描写している。

なお、伊勢物語の題名について、なぜ「伊勢」なのかについては諸説がある。

- ・女性歌人伊勢の筆になるから
  - ・伊勢齋宮の記事が巻頭にあるから（小式部内侍本）
  - ・齋宮の記事が全編の中心をなすから
  - ・妹背物語の中略
- 等々。

#### ○業平松

また、伊勢物語に

むかし、男、伊勢の国なりける女、またえあはで、となりの国へいくとて、いみじう恨みければ、女

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな

女は斎王、「大淀の松（女）は冷淡でもないのに、浦だけを見てあなたは浪のように帰っていくのですね、私をうらみながら」の意

「松」と「待つ」、「浦見て」と「恨みて」が掛詞、浪が男をさしている。

この大淀の松が「業平の松」として最近まであり、土地の人に親しまれていたが、昭和五十年、老朽化のため切り倒されている。今はその場所に柱石碑と三代目の松が植えられている。

## ○斎宮歴史博物館

1988・1・20 着工 建築費 約16億5千万円

建設場所 多気郡明和町竹川1503

鉄筋コンクリート平屋一部二階建

敷地面積 18,000m<sup>2</sup>

建築面積 4,360m<sup>2</sup>

延床面積 5,077m<sup>2</sup> (直接基礎工法採用)

### ・映像展示室

15台のスライドプロジェクターから連続して映像が映しだされ、紗幕の背後からは人形が浮かび上がり、音と光が重なり合って斎宮の成立から終焉までを紹介する。

### ・展示室Ⅰ

発掘調査と文献研究にもとづいて斎宮を多角的に紹介する。

300分の1の斎宮全体像、人形で見る群行、古代伊勢神宮の模型の中に再現される斎王の祭祀など目で見える文献の世界である。

### ・展示室Ⅱ

斎宮の背景となった三重の歴史風土を「まつりといのり」という側面から紹介する。

## ○ふるさと会館

明和町役場、総合体育館、中央公民館などが立並ぶ一角に「ふるさと会館」がある。

平成2年7月17日着工 平成3年3月30日完成

鉄筋コンクリート造、一部鉄骨二階建 建築費 6億1200万円

敷地面積 2,783㎡

建築面積 936㎡延床面積 1,428㎡

1階は図書館、2階は歴史民俗資料館となっている。

歴史民俗資料館では、明和町の伝統産業である御糸（いと）木綿の藍染の工程を人形や模型を使って再現しているほか、液晶スクリーンとスライドの組み合わせにより、町内のまつりや文化財を映像展示している。

その他、「明和町の農業～米のできるまで～」など、この地の産業や機殿とのかかわりを知るうえで興味深い。一見の価値のある資料館である。

## ○隆子女王の墓

第四十三代齋宮隆子女王、父は醍醐天皇の皇子章明親王

安和二年十一月十六日卜定され、天禄二年九月伊勢に群行された。わずか三年二か月の在位で齋宮寮で病のため世を去り、ここ明和町算所に葬られたと伝えられる。

東西31m、南北43mの八角形。主墳は直径16m、高さ2.2m

## ○竹神社

垂仁天皇の御代、竹連（たけのみらじ、竹氏という豪族・連は姓（かばね）の祖宇迦之日子（うかのひこ）の子、吉日子（よひこ）が天照大神の奉行に供奉してこの地に留まり、孝徳天皇の御代に至って、竹郡（たけのこおり）創建の際にその末裔がこの神社を創祀した。



竹吉日子については、「皇太神宮儀式帳」に「竹の首（おびと・かばね）吉日子の名がみえ、神社は櫛田川の古流祓川の東岸台地である竹川字中垣内に祀られていた式内社である。

和銅六年（713）五月の詔で、二字好字ということで竹が多気となったが、伊勢国多気群はたけのこおりと発音されていた。

斎王制度が固まるにつれて地名が「竹の都」から「斎宮」にかわっていった。

#### ※参考資料

神宮パンフレット 明和町パンフレット「史跡斎宮跡」

斎宮物語（明和町） 伊勢志摩を歩く（皇学館大学）

斎宮と文学（中川 紘 梵） 伊勢物語（岩波文庫）

まんが「万葉集」（主婦と生活社） 竹神社パンフレットほか